

倉橋惣三への一つの接近（その二）

——「たけくらべ論」に見られる「子ども観」の多層性——

本田 和子

(3) 「たけくらべ」の舞台空間

① 「大音寺前」をめぐる

「たけくらべ」を論じる人々が、等しく言及の対象とするのは、その作品の舞台となった「大音寺前」の、環境としての特異性である。「美登利」という女主人公が、「遊廓」という特殊な空間との結びつきにおいてのみ存在し得る個性であり、作品世界のない手である子どもたち一人々々も、また、この独特な土地の

申し子であってみれば、「大音寺前」を抜きにして「たけくらべ」を語り得ないのは、当然の経緯であった。

しかも、先ず、「大音寺前」という固有名詞を指示して作品空間を出現させることにより、物語の幕が明けられるのだ。すなわち、人口に膾炙した冒頭の数行がそれである。「廻れば大門の見返り柳いと長けれど、お歯ぐる溝に燈火うつる三階の騒ぎも手に取る如く、明けくれなしの車の往来にはかり知られぬ全盛をうらなひて、大音寺前と名は広くさけれど、さりとは陽気の町と住みたる人の申しき」^{*1}

こうして、最初に実在の地名を「言葉の世界」に移しかえるこ

とにより、現実の地理的空間の一部を物語空間として切り取り、虚構の次元に移行させる。そして、そこに紡ぎ車が据えられ、物語の糸が紡がれ始める。こうした展開のしかたは、一葉の他の作品と比しても、一つの特色として扱えられるのではないか。例えば、「大つごもり」の場合、女主人公お峰の奉公先である山村家が、「白金の台町」と知れるのは、物語の半ば近くであり、また、「十三夜」においては、物語の前段の舞台である斎藤家が、「上野の新坂下」とその所在を明きらかにするのは、物語が折り返し点を過ぎてからなのである。

こう見てくると、「大音寺前」は、作者自身にとっても、「たけくらべ」という作品世界を出現させる「絶対の場所」であったと言えそうである。山村家は、豪壮な邸宅を置いておかしくない土地であれば、「麴町」でも「高輪」でもよかったであろうし、また、斎藤家は、つつましい勤め人の借家住まいにふさわしい町すじなら、どこであっても大差はない。然し、「たけくらべ」の舞台だけは、「遊廓」と「市街地」を結ぶ境界地帯、この「大音寺前」以外のどこでもあり得なかつたのである。

「たけくらべ」は、関良一がいみじくも指摘したように、^{*2}「吉原物語」であり、しかも、「吉原へ入る物語」であると同時に、「吉原を去る物語」であった。「吉原遊廓」は、作品世界の求心力

と遠心力の中心として、子どもたちをそれぞれに呪縛している。その結果、「美登利」は、お歯ぐる溝に囲まれた暗い円の内側に吸収され、「信如」は、それらのすべてに背を向けて遠くへ去る。こうして、主要な人物の二人が、各々、吉原の「内と外」へ袂を分かつたとき、物語の幕が降りる。これが、この「吉原物語」の必然なのだ。遊女の卵と僧侶の卵との共存は、そしてこの二人の幼い恋は、「廓」という非日常空間と、「庶民の生活の場」という日常的空间との境界に位置して、そのいずれにも属さない「大音寺前」を舞台とするときにのみ、可能だったのである。

ところで、倉橋もまた、「大音寺前」への目配りを忘れてはいない。すなわち、「歴史は地理を知らなければわからぬ。人間の心理生活はその外国環境を知らなければ理解せられぬ。況して子供の生活をや。ことに一種特別な環境の内にある『たけくらべ』^{*3}の子供達をや」という書き出しで、彼の「たけくらべ論」は、始まるのだ。

心理学者の常として、倉橋の意識は、「大音寺前」を、子どもらに「独特な影響を及ぼす生育環境」と把握し、「たけくらべ」の子ども群像を論じるのに、看過し得ぬ要因と位置づけた。にもかかわらず、自身の足で探索を試みた彼の視線は、何よりも先に、「大音寺前」の変貌ぶりに吸い寄せられてしまう。原文に、

「三島神社の角をまがりてより、これぞと見ゆる大厦たけもなく」⁴と書かれたあたりの家並の建て込み、燈火のうつつた筈のお歯ぐる溝は、「あるかないかわからないような小溝なま」⁵に変わってしまったている。美登利が朝参りをした中田圃の稲荷や、正太郎に行き逢った睦路など、今はその面影もない。江戸の周縁に位置して、市街地から隔たる土地であったからこそ、「遊廓」の所在地として選ばれたのであろうに、不断に拡張を続ける東京という大都會は、空地を求めてあらゆる間隙に食いこんできている。そんな時代の動きに、倉橋は、先ず、目を奪われたのであった。しかも、それは、「たけくらべ」が書かれた明治二八年から、倉橋が「たけくらべ論」の筆を執った四五年までの、僅か十数年間の出来事であった。

前田愛も、その「たけくらべ論」⁶の中で、二枚の地図を併記して、この変貌ぶりに注目している。すなわち、明治一三年の地図の上で、「大音寺前」を含む竜泉寺村は、まだ一面の水田であった。そして、島のように浮かぶ「吉原」と、金杉をつないで、「大音寺前」の街すじは、細い橋のように見える。然し、明治四二年の地図において、竜泉寺町は、びっしりと人家で埋まった市街地と化している。かつての水田は、僅かに、散在する大小の池として面影をとどめるだけだ。

前田は、この急速な都市化をふまえて、一葉が作品の舞台に選んだ頃の「大音寺前」は、膨張過程の丁度中間に位置して、極めて不安定な時期であったと捉えている。すなわち、半農村的景觀が次第に失なわれ、「ムラ」の習俗が、「都市」のそれに変わりつつある時代なのだ。そこで、前田は、物語の開幕を飾る千束神社の夏祭を、鎮守神を中心に結ばれた農村的体質の象徴とみなし、ムラの記憶がよみがえってくる一日であると言う。とするなら、逆に、終幕を彩る大島明神の酉の市は、特定の氏子を持たぬ金銭の神の祭りであり、そのゆえに、マチ的、吉原的祭礼と位置づけられよう。その結果、「こうした二つのマツリがつくりだす位相の差は、子どもたちの世界にも波及する。夏祭の宵に表町組、横町組の旗じるしをかかげて競いあった大音寺前の子ども集団は、酉の市の夜には結束を解いて分散し、人出をあてこんで小遣いほしさの俄か商いに精出すことになる」⁷のだ。

美登利の「子どもの時間」は、こうして、子ども仲間が解体した酉の市の賑わいの中で終りを告げ、大音寺前の「子どもたちの時間」も幕を降ろした。そして、いま、私どもの視野に、それらは、一きわの哀切さを帯びて浮かび上ってきている。何故なら、農村が都市へと変貌を強いられる激動の時間と、子どもたちの成長の時間が重ね合わされ、崩壊していく村落共同体の運命と、子ど

も集団のそれとが重ね合わされる。こうして、作品世界の隠された構造が掘り起こされるとき、子どもの眼は、言葉の背後を透視する力を獲得し、結果として、あんなにまで輝いていた「子どもたちの時間」を、無惨に奪い去ったものは一体何であったのか、という問いが、重く心に沈むからである。

ところで、先に触れたように、倉橋もまた、「大音寺前」の姿貌に目を見張った。然し、作品に対するこのような深い読みは、文学研究者ならぬ倉橋の持ち分ではない。従って、彼は、ただ「人家稠密の横小路」に戸惑いながらも、その中から「遊廓近い土地柄の気分」⁹、だけを引き出そうと試みる。彼の意識は、「大音寺前」を、子どもたちの個性の中に「ある共通の色合い」¹⁰を帯びさせる独特な環境とのみ把握し、それを、ひとえに「遊廓」との距離に収斂させるのだ。

こう見てくると、私どもは、次のような興味深い事実¹¹に気付かされる。すなわち、倉橋は、「大音寺前」と、二つの異った層で出会っているのではないか。一つは、「吉原物語」の舞台としてであり、いま一つは、近代という波に翻弄される大都市周縁部の象徴としてのそれである。言うまでもなく、彼が自覚的に把えたのは前者であった。後者に関しては、出会いの驚きだけが表明されていて、それ以上の取り組みは見られない。しかも、彼は、変

化を見据えることを避け、慌しく過去の経験の中に遡行する。つまり、明治二八年頃に、その畏限で遊んだことがあるという、自身の追憶に立ち戻るので。

ここには、経験科学者としての倉橋の面影が、ほの見えてい。と、同時に、近代化への不信が、未だ、その席を得ていなかった二〇世紀初頭という時代の横顔をも、垣間見ることが可能である。いずれにせよ、倉橋は、作品の舞台空間と、意識的、無意識的に、上記のような出会いを持ちながら、それぞれの子ども像に論を進めて行くのである。

② 倉橋の「場所」

一般の倉橋論について、彼は、その一生を通じて「陽の当る道」を歩んだ人物とされている。確かに、府立一中、旧制一高、そして東京帝国大学という彼の履歴は、いわゆるエリートのものであり、三〇に満たぬ若さで、東京女高師という官学に職を得て、時をおかずに保育界の指導者的地位になったというその歩みは、一見、恵まれようであったかのように思える。そして、彼自身も、その自伝的随筆集「子供讀歌」¹¹において、いとも幸せそうに、その順調な歩みの跡を回顧して見せるのだ。

然し、皮肉なことに、その同じ「子供讚歌」が、散見される幾つかのエピソードを通して、倉橋の上に注がれた光が、彼自身の自覚を超えて、極めて微妙な、独特の色合いを帯びていたことを、秘かに囁きかけてくるのではないか。例えば、彼は、一高の寮生活の中で、「武道もせず、野球もせず、ストーム仲間にもはいらない」¹²はずれ者であった。また、帝大生としては、「帝大教授学生気質」¹³の中に、幼稚園通いばかりしている「変り者」として登場していた。もちろん、倉橋自身の回想の中で、それらすべては、陽の側面から肯定されている。一高時代の異端ぶりにしても、彼はその理由を、「どっちかといえ、おぼっちゃん育ちの方で」¹⁴「いわばおとなしい青年であった」¹⁵からと説明し、「学生気質」中の文章も、彼の子ども好きを「面白おかしく」¹⁶紹介したものと、極めて好意的に引用しているのである。

内村鑑三に心酔し、ワーズワースに傾倒した若き日の倉橋は、確かに、世俗的な栄達を超えて、人間としての美と真に憧憬するロマンチストであったに相違ない。そして、彼の周囲には、傾向を同じくする友人たちがいて、彼の夢を包んでくれたもののようなのである。例えば、倉橋が幼稚園から貰ってきた粘土製の人形を、「表紙の破れたレクラムのそばに置いたりする、入浴ぎらいの男」¹⁷や、将来は牧場を経営して、その中に幼稚園を建てようと、共に

「メドウ・キンダー・ガルテン」を夢見た友人などがそれである。従って、倉橋自身の自覚的な意識の世界では、よき理解者たちに包まれて、彼の「子どもとの道行き」は、常に、幸せであったと言い得よう。

然し、先にも触れたように、彼が選んだ道は、明きらかに、「はずれ者、変り者」のそれであった。倉橋は、周知のように、オーソックスな「心理学者」でもなく、また、「教育学者」でもなかった。彼が住まいを定めたのは、「幼児保育」という未開の地しかも、学問の世界に位置づき得るか否かも定かではない、あやしげな土壌だったのである。

子どもを育てる営み、特に、幼い者へのそれは、人類がその歩みを開始して以来、何らかの意味で大人たちの課題となり、何らかの形で、それらの解決が試みられつつ、今日に至っている。人間の赤ん坊が、他の動物たちのいずれにもまして、他者による養育を絶対条件とし、極めて依存性の強い存在としてこの世に出現する以上、それは、人間の大人の従事すべき不可避の営みであった。そのゆえに、また、幼い者の養育は、すべての大人たち、性別が分化した社会ではしばしば、大人の女たちだったりするのであるが、彼女らの誰でもがかかわりをもつ、当り前のことがらとして処理されてきた。赤ん坊が生まれれば、乳を吞ませ、着物を着

せ、彼らが歩き出し、もの心つくようになれば、物事の道理や秩序を教え、時には遊び相手をつとめ、とにかく、それぞれの社会において「一人前」と認められるまで、世話をし、援助するのは、当然のことだったのである。

考えてみれば、育児行為は、人という種の保存、及び、その文化の存続という見地から見て、言うまでもなく、最も根源的・基盤的な営みに相違ない。然し、余りにも根源的・基盤的でありすぎるために、そして、誰でもが従事する日常的な営みであるゆえに、学問や思索の対象とされ難い性格を持たされてきた。「食べること」や「着ること」が、極く最近まで学問研究の対象となし得なかつたように、そして、現在と言えども、十分に根を張っているとは言い難いように、「育てること」も、大学アカデミズムの中には位置づき難い領域であつた。倉橋が選びとつたのは、そんな「場所」だったのである。

倉橋は、彼の興味を引き続けて止まない幼い人たちのとりことなり、たまたま出会つた「ペスタロッチ伝」に陶醉した。彼は、「子ども」と「ペスタロッチ」の兩者を、風に運ばれて自身にもたらされた恩恵と受けとめつつ、子どもの世界への傾斜を深めていった。従つて、倉橋にとつて子どもとは、学問研究の対象である前に「生きた事実」であり、特定の理論や方法では律し難い存

在であつた。結果として、彼の立つ「場所」は、大学アカデミズムから、ますます遠ざかつていかざるを得ない。倉橋の児童研究が、オーソドックスな学問研究の世界で正当に評価され難く、中樞に位置を占め得なかつたのは、改めて考えるまでもなく、当然の経緯であつた。彼に与えられたのが、学生時代と同じ「変り者はずれ者」の「微」だつたであらうことも、想像に難くない。

こう見てくると、倉橋の上に、常に陽光が降り注いだというのでも、「保育界」という狭く限られた領域の中だけの現象ではないか。そして、「保育界」及び「保育研究」とは、学問の側から見ると、遙か辺境に位置する「しがたない領域」であり、科学と通俗的な常識との境界にあつて、そのどちらにも属さない、「あいまいな分野」に過ぎない。天下国家を慮る経世の学や、事象の極限を追求する真理の学と、同列に論じられよう筈もない。そもそも、「子育ての実際」など、格別の教養も知性も必要としない、婦女子の営みだつたのであるから。

③ 「大音寺前」と「保育界」

こゝで、私は、次のような、一見、奇矯とも思える対応を試みたいと思う。すなわち、「たけくらべ」の美登利が女王として振

舞った「大音寺前」と、倉橋が君臨した「保育界」を、重ね合わせて見ようというのだ。「大音寺前」が、「遊廓」と「庶民生活」を結ぶ橋であるなら、「保育界」もまた、「学問」と「通俗的生活性」の境界に位置している。「遊廓」が、日常性を拒否して「反俗の聖性」を堅持したように、「大学」もまた、アカデミズムの名の下に庶民生活からみずからを隔て、「非日常的聖域」たろうとする。日常性を「俗」と見るなら、両者はいずれも「聖」の徴の附さるべき特別の世界なのだ。従って、「大音寺前」と「保育界」は、共に「俗」と「聖」の境界にあって、構造的に同じ位置を占める。

「たけくらべ」の子どもたちが、美登利を接点として「吉原」のおこぼれにあずかったように、「保育界」の人々もまた、倉橋を介して「アカデミズム」の風に触れようとした。しかも、「たけくらべ」の子どもたちが、世間一般の与える蔑みのしるしに気付くよしもなく、ただ毎日を遊び呆けていたように、「保育界」の人々もまた、蔑視とまでは言わずとも、必ずしも正当に評価されてはいないことなど意にも介さず、ひたすら、子どもらとの日々を過ごしている。そんな彼らの中心に、「美登利」は、そして「倉橋」は、君臨していたのだった。両者は、ここでもまた、見事な重なりを見せると言えそうである。

然し、美登利は、自身の体に刻印された「はずれ者」の「徴」に露ほども気付かず、得意満面と女王の座にあったとしても、倉橋は、知識人の常として、己れの住まいする「場所」の辺境性に全く無感覚であり得たとは思えない。むしろ、「保育界」という地盤の脆弱性を、誰よりもよく知っていたのは、彼自身だったのではないか。例えば、倉橋は、当時を回想して次のように語っている。「大学には保育を講ずる者はいないし」^{*19}「彼は思うこと疑うことをだれにきいてもらいようもない、あわれなよるべない保育理論研究者であった」^{*20}と。そして、「フレイベル会例会が、月々開かれ、また、夏期講習が催されたりして、それ相当の、地味な歩みはつづけられていたが、何分、大きな東京のなかの、小さな幼稚園界というふうを免れなかった」^{*21}と記している。こうして、倉橋は、自身の着手した営みが、足もとも覚束ない不確かな地盤に、独力で家を建てるような孤独なそれであることに、気がかざるを得なかったであろう。

にもかかわらず、人々の眼に、倉橋は運命の寵児とうつり、また、彼自身の「子供讃歌」も、常に冴え冴えと陽的な音色を響かせる。私どもは、そこに、彼の秘やかな「演技」と「虚構」の跡を見出すことが出来るのではないか。それは、言うまでもなく、他者をあざむこうとか、事実を糊塗しようとする、意図的な

「演技」や「虚構」ではない。人が、他者の期待や夢に、誠実に答へようとするとき、自ずから出現する根源的な「演技」であり「虚構」なのだ。そして、それらは、仮に、世間一般から、或いは、「大学アカデミズム」から、周縁に追いやられ軽侮の視線を注がれたとしても、自身の選択に悔いる余地はないという自負と、周囲の保育者たちの熱いまなざしに支えられていた。そのゆえに、倉橋は、自身に刻印された「はずれ者」の「微」を、恥じる必要はなかったのである。

然し、倉橋の「たけくらべ」への関心と、「美登利」に寄せる格別の愛着は、そんな彼の、表に現われ得なかつた分身の存在を垣間見せる。自身の位置する「場所」と「大音寺前」のこの重畳性、両者は共に「境界」なるがゆえの両義性を背負い、共に「近代」という嵐に翻弄されることによる不安定性を抱えこんでいる。それらがお互いに照応し、共鳴し合う秘やかな気配に、彼の無意識は鈍くあり得なかつたのである。

(つづく)



倉橋惣三選集第四卷所収 フレーベル館
* 6・7 前田 愛 「子どもたちの時間」 「樋口一葉の世界」所収
平凡社選書
* 11・12・13・14・15・16・17・18・19・20・21 倉橋惣三「子供讃歌」
倉橋惣三選集第一卷所収 フレーベル館

- * 1・4 樋口一葉「たけくらべ」角川文庫
- * 2 関 良一 「樋口一葉 考証と試論」有精堂
- * 3・5・8・9 10 倉橋惣三「一葉女史の小説に現われたる子供」